



ちちまこ  
ままこ  
ままこ

みやざわ けんじ  
作：宮沢 賢治

イラスト ふうやん fuuyanm (アーティストバンクジャパン)

山の神の 秋の祭りの晩ばんでした。

亮二りょうじは

新しい水色のおびをしめて、  
それに十五銭せんもらって  
お祭りに出かけました。

向こうの神楽かぐらでんには、

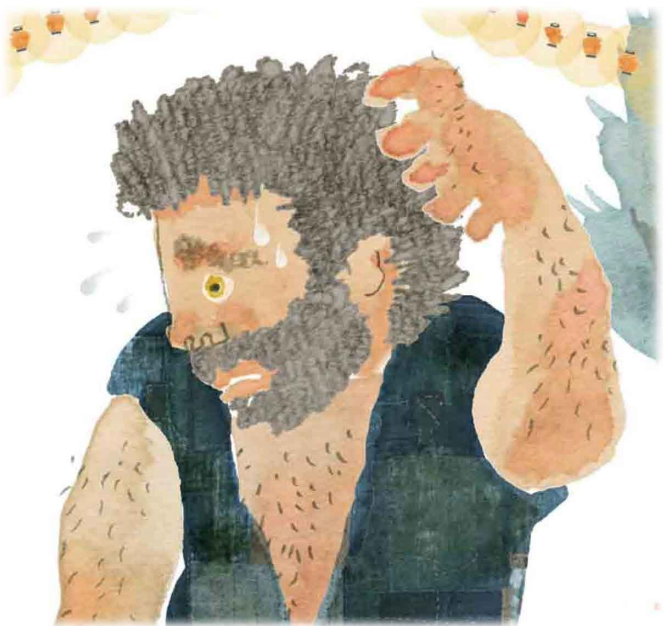
ぼんやりいっ五つばかりのちょうちんがついて、  
これからお神楽かぐらが始まるところらしく、  
かねの音だけしずかに鳴っておりまして。

亮二はしばらくぼんやりそこに立っていました。



そしたら、むこうの方で  
なにか大きな声がして、  
みんながそっちへ走っていきました。

亮二も急いでかけていって、  
みんなの横からのぞきこみました。



すると大きな男が、  
かみをもぢやもぢやして、  
しきりに村のわかい者ものに  
いじめられているのです。

大きな男「ああ…うう…」  
ひたいからあせを流して  
なんべんも  
頭を下げていました。

てかてか髪<sup>がみ</sup>をわけた村のわか者が、  
みんなが見ているので、  
いよいよいきおいよくどなっていました。

わか者「貴様<sup>きさま</sup>みたいな、よそから来たものに  
馬鹿<sup>ばか</sup>にされてたまつか。

早くぜにをはらえ、ぜにを。

ないのか、この野郎<sup>やろう</sup>。

ないなら何<sup>な</sup>して

物食<sup>く</sup>った、こら」

(バン！)



男はひどくあわてて言いました。

大きな男「た、た、た、たきぎ持って来てやるから・・・

たきぎをあとで百把ぼ持ってきてやっから

ゆるしてくれろ」

わか者「うそをつけ、この野郎やろう。

どこの国に、だんごごにくしに

たきぎ百把ぼはらうやづがあっか。

全体貴様きさん、どこのやつだ」

大きな男「そ、そ、そ、

そいつはとても言われない。

ゆるしてくれろ」

男は黄金色きんのめをぱちぱちさせて、

あせをふきふき言いました。

いつしよになみだもふいたようでした。





亮二はすっかりわかりました。

亮二（ははあ、あんまりおなかですいて、  
もうぜにのないのもわすれて、  
だんごを食ってしまったのだな）

（ないている。悪い人ではない。  
かえって正直なひとなんだ）

（よし、ぼくが助けてやろう）

亮二は

ただ一まいのこった白銅はくどうを出して、

それをかたくにぎって、

みんなをおしわけて、

その男のそばまで行きました。

亮二は、その男の

ぞうりをはいた大きな足の上に、

だまってお金をおきました。





すると男はびっくりした様子で、  
じつと亮二の顔を見おろしていましたが、  
やがていきなりかがんでそれを取るやいなや、  
大きな声でさけびました。





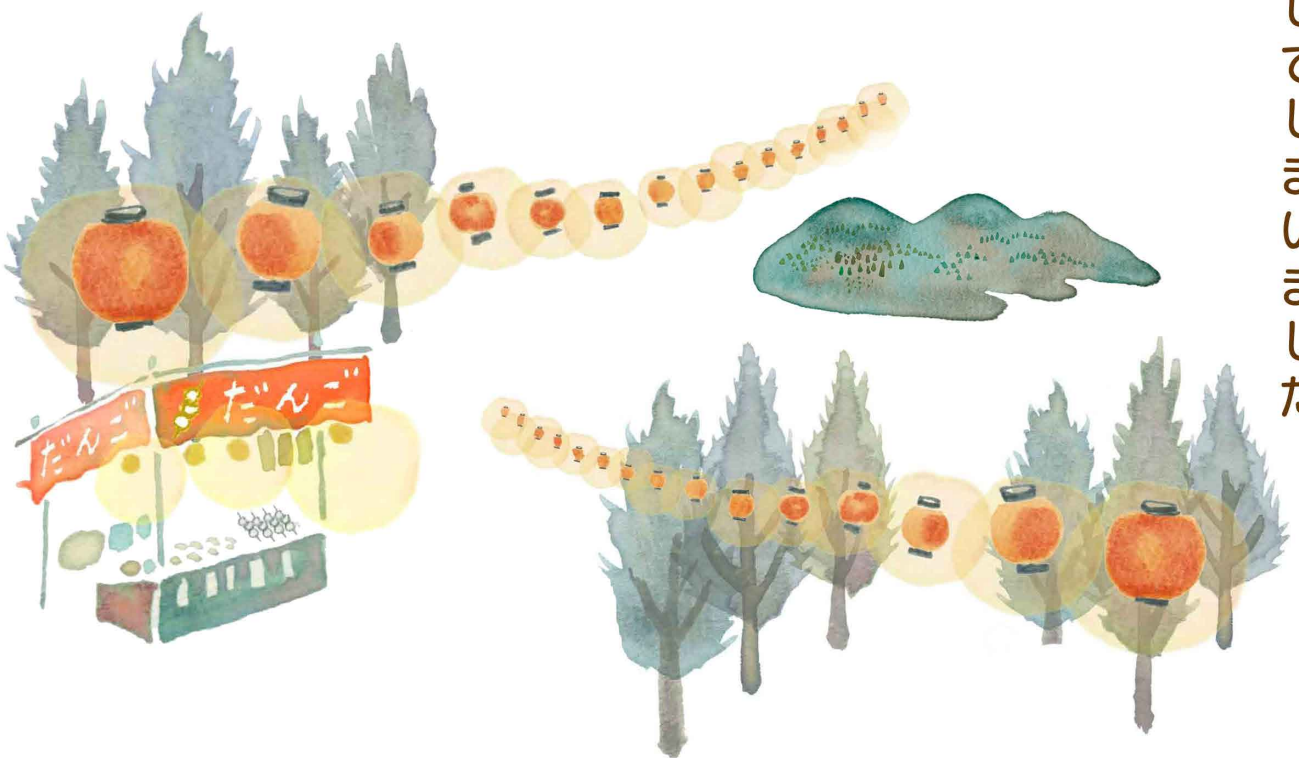
大きな男「そら、ぜにを出すぞ。

これでゆるしてくれろ。

たきぎを百把ぼあとで返すぞ。

くりを八斗とあとで返すぞ。」

言うが早いか、いきなりわか者やみんなをのけて、  
風のように外へにげだしてしまいました。



かぐら  
神楽の笛がそのとき

はじまりました。

けれども亮二は

もうそつちへは

いかないで

ひとり田んぼの中の

ほの白い路を

みち

急いで家の方へ

帰りました。

早くおじいさんに

その男の話を

聞かせたかったのです。



おじいさんは　はじめはだまって  
亮二の顔を見ながら聞いていましたが、  
おしまいにはとうとう  
わらい出してしまいました。

おじいさん「ははあ、  
そいつは山男だ。」

山男というものは、  
ごく正直なもんだ。  
おれもきりのふかい時、  
度々山であつたことがある。

しかし山男が祭りを  
見に来たことは  
今度はじめてだろう。  
はっはっは。  
いや、いままでも来ていても  
見つからなかったのかな」



その時、表のほうで、  
どしんがらがらという大きな音がして、  
家は地しんの時のようにゆれました。

亮二は思わずおじいさんにすがりつきました。

おじいさんも少し顔色をかえて、

急いで外に出ました。

亮二もついて行きました。



亮二「うわあ！」

見ると 家の前の広場には、  
太いたきぎが山のように  
投げ出されてありました。

太い根やえだまでついた、  
ぼりぼりにおられた  
太いたきぎでした。



おじいさんは  
しばらくあきれたように、  
それをながめていましたが、  
にわかに手をたたいてわらいました。

おじいさん「はっはっは、  
山男がたきぎを

お前に持って来てくれたのだ。

おれはまたさっきのだんご屋にやると  
いうことだろうと思っていた。

山男もずいぶんかしこいもんだな」



亮二はたきぎをよく見ようとして、  
一足そつちへ進みましたが、  
たちまち何かにすべって  
転びました。

亮二「あいたたた。

……え……？」



見るとそこら一面、  
きらきらきらきらする  
くりの実でした。



亮二「おじいさん、  
山男はくりも  
持って来たよ」

おじいさんもびっくりして言いました。

おじいさん「くりまで持って来たのか。

こんなもらうわけにはいかない。

今度何か山へ持って行っておいでなよう。

一番着物がよかろうな。」



亮二はなんだか、

山男がかあいそうだなきたいような  
へんな気もちになりました。

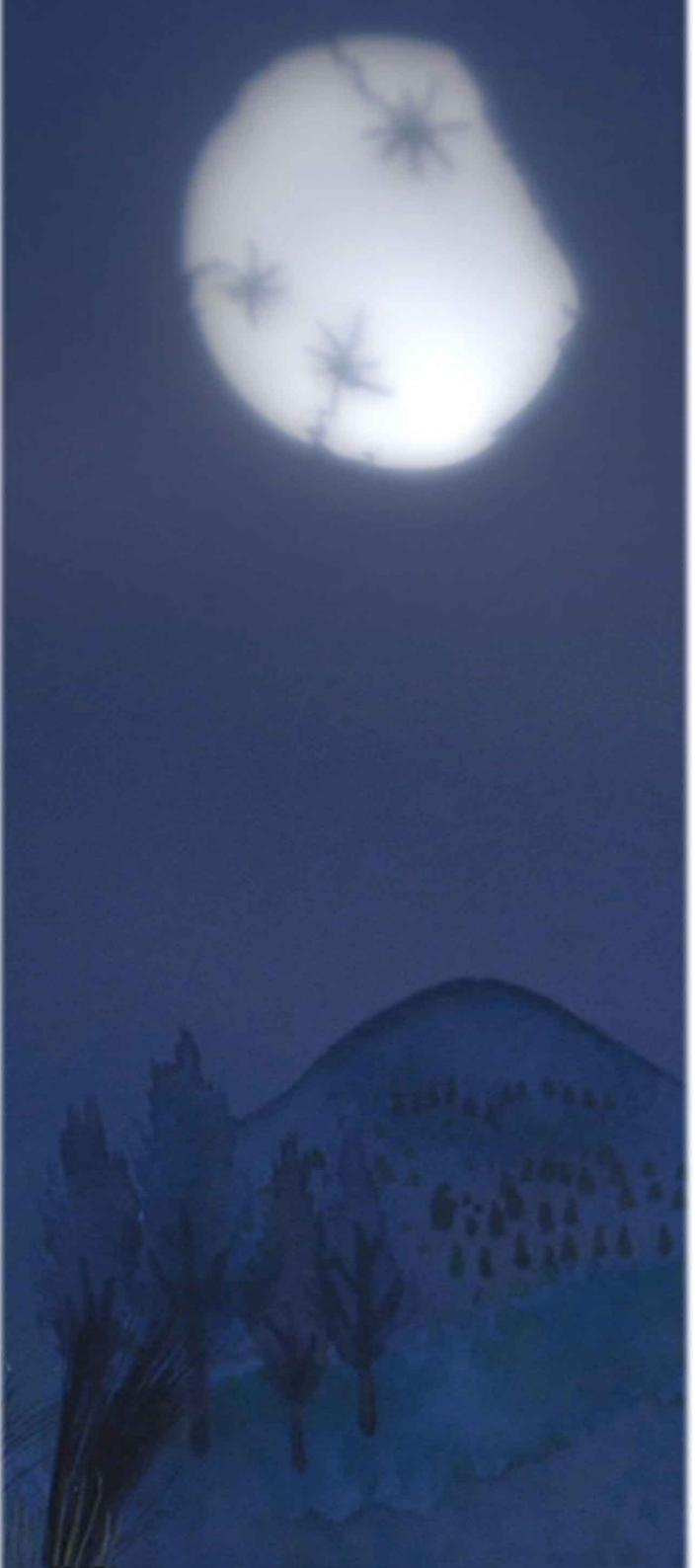
亮二「おじいさん、山男はあんまり  
正直でかあいそうだ。

ぼく、何かいいものをやりたいな」

おじいさん「うん、今度、ふとんを

一まい持って行ってやろう。

それからだんごも持って行こう」





亮二はさげびました。

亮二「着物とだんごだけじゃつまらない。  
もつともつといい物をやりたいな。

山男がうれしがってないて

ぐるぐるはねまわって、

それから体が天にとんでしまいうくらい  
いいものをやりたいなあ」

おじいさんは

おじいさん「うん、

そういういいものあればなあ。

さあ、うちへ入って豆をたべろ。

そのうちに、おとうさんも帰るから」

といいながら、

家の中にはいりました。

亮二はだまって

青いななめなお月さまをながめました。

風が山のほうで、ぐうっと鳴っております。



おわり